

受験番号

---

氏 名

---

2013年

# 美術検定

1 級記述式問題／解答用紙



問題は次ページに続きます。以下の余白はメモなど自由にお使いください。

[長文記述問題]

以下の2つの設問について、それぞれ500文字以内で解答してください。

【4】あなたは、ある展覧会の一般来館者向け解説ボランティアとして、下図の作品解説を担当することになりました。あなたならどのような解説をしますか。以下の[A]～[C]の資料をバランスよく利用したうえで、解説内容を記述してください。また、来館者が同時代の作品をより深く鑑賞する手助けとなるような内容に構成してください。

[A]



エミール・ノルデ  
《最後の晩餐》1909年制作  
油彩・キャンヴァス、66.0cm × 107.0cm  
コペンハーゲン国立美術館蔵

[B] エミール・ノルデ略年譜

1867年	デンマーク国境近く、プロイセン領ノルデ村にプロテスタント農民の子として誕生
1884～87年	木彫師の修業、家具工場で働く
1888～92年	木彫師として働く傍ら、工芸学校などでドローイングも学ぶ
1892～97年	スイスの工芸美術館で装飾デザインの講師を勤める
1898～1902年	ドイツの画学校で絵画を学びながら、パリで印象主義やポスト印象主義絵画など当時の最先端美術に親しむ
1902年	結婚し、ベルリンに転居
1904年	ライプツヒで作品を展示、ベルリン・ヴァイマルで個展開催
1906～07年	1906年のベルリン分離派展に出品、ドレスデンで個展を開催。ムンクに出会う。ブリュッケに加わる
1908～10年	ベルリン分離派に選出されるが、1910年に除名。1909年より北ドイツのルッテピュル村に転居、宗教的テーマに取り組む
1912年	フォルクバンク美術館で大規模な展覧会を開催。青騎士の第2回展に出品。この頃から美術館がノルデの作品収集を始め、名声を得る
1913～14年	ドイツ帝国植民地省の学術調査団に加わり、モスクワ、シベリア、日本、中国、マニラ、ニューギニアなど各地を訪問。旅先で多数のスケッチや水彩画を制作
1920年頃	ナチス党员となる
1927年～	故郷近くのゼーピュルの農場を買い取り永住。同年、ドレスデンで展示作品数433点という最大規模の展覧会が開かれ、他都市にも巡回
1933年	ナチスがノルデの作品を退廃芸術とし、1052作品を各美術館から押収。「退廃美術展」で展示される
1941～44年	ナチスの制作禁止令により、ゲシュタポの監視下に置かれる。秘密裏に「描かざれる絵」の水彩画作品群1300点あまりを制作
1945年～	「描かざれる絵」を元にした作品を制作
1956年	ゼーピュルで没す

[C] エミール・ノルデに関するテキスト

(略) 荒々しいタッチと生彩に富む色彩で北方の荒涼たる、また神秘的なオーラに包まれた自然や…… (略) ……原初的な生命力を感じさせる風景、人物などを描いた。(略) ……ユダヤ人のキリストやその弟子たちを、西欧で生まれ育った白人のように描いてきた伝統的なキリスト教絵画を批判したノルデの宗教画は、そのプリミティブな力強さ、大胆さがわざわざして、9つの画面よりなる大作《キリストの生涯》が聖職者の圧力で展示拒否にあうなど、当時多大な物議をかました。

(千足伸行監修『新西洋美術史』pp.389-390、西村書店、1999年)

(略) 宗教画の制作を動機として「視覚的外面的刺激から感覚的内面的価値への転換」が起こった一九〇九年で、色彩の精神的価値を目覚めさせたこの転換によって、それまで印象主義の影響を受けた超自然主義と特徴づけられていたノルデの画風は、一挙に表現主義へと突入する。色で何かを描くのではなく、色が画家を通して自然物の造化や形成のように効果を現してくる。色が主体となって、音楽の和音のように、色相互の輝きを規定し、内容に精神的価値を

与える、それが彼の表現主義への出発点であった。  
(土肥美夫著『ドイツ表現主義の芸術』p.191、岩波書店、1991年)

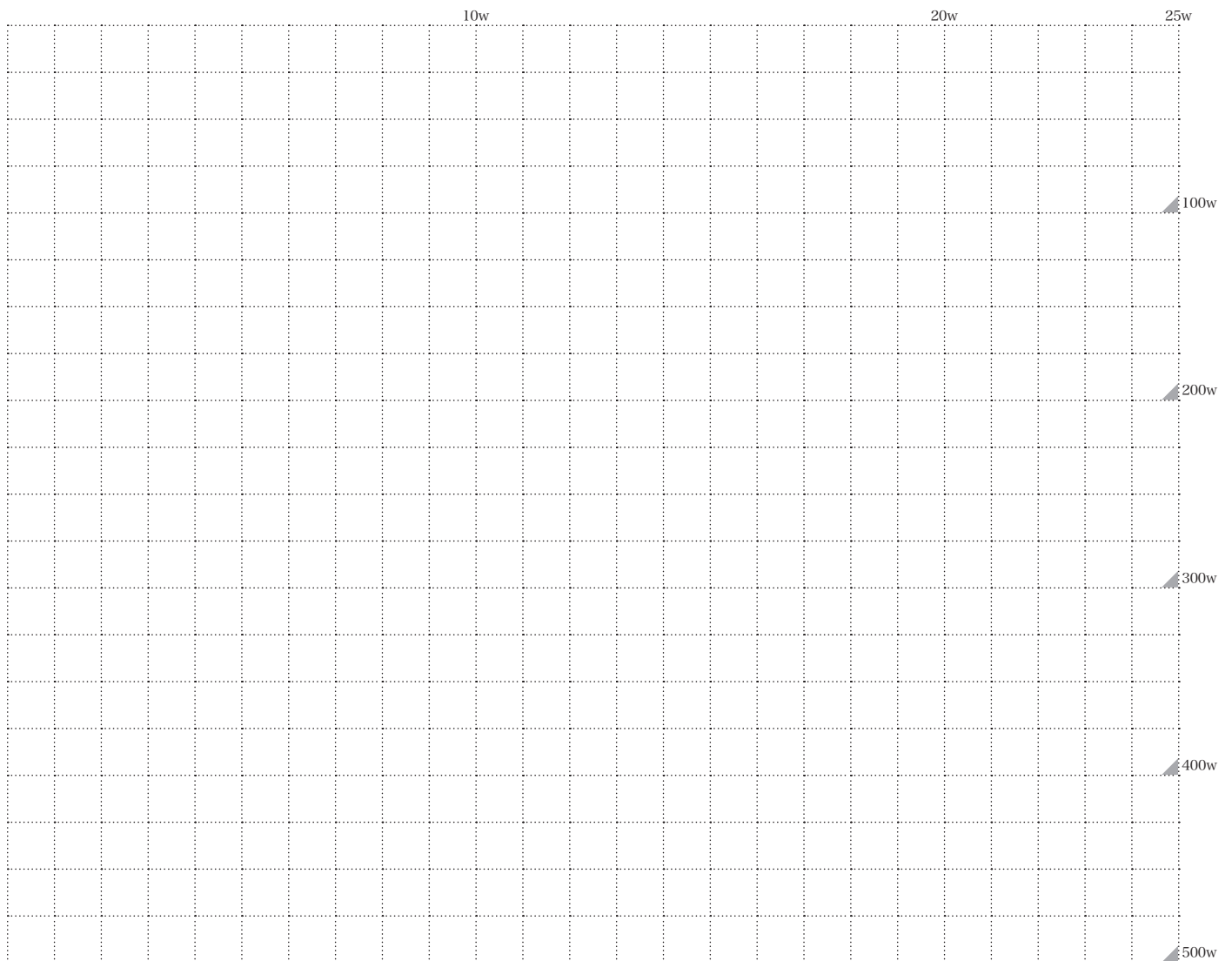
プリミティズム美術について

5 私たち芸術家がプリミティブ美術の造形表現にここまで惹かれるのはなぜか。

6 私たちの時代は、陶器や宝飾品、実用品、衣服に至るまで制作にあたっては下描きが必須とされる。しかしながら、プリミティブ民族の作品においては、素材は手のなかや指の間につかまれ創造されていくのだ。造形の喜びや創作への愛が表現へと駆り立てる。そこには絶対的な独創性があり、力と生命に根ざした非常にシンプルな造形のなかに情熱的な、しばしばグロテスクな表現——生来持つ表現への喜び、それこそが私たちをプリミティブ美術に惹き寄せるものだろう。

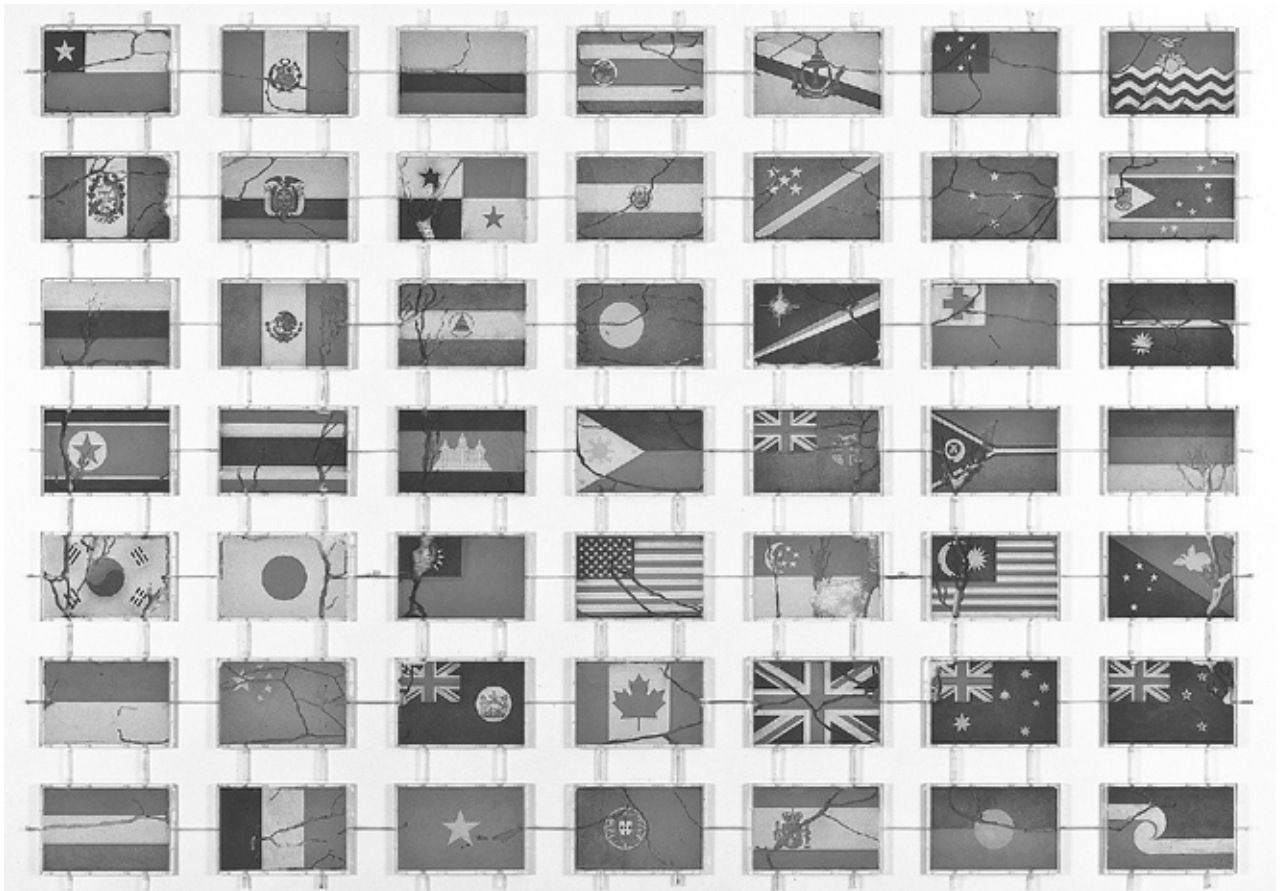
(エミール・ノルデ回想録『戦いの年』/ Jahre der Kämpfe, Emil Norde, "Years of Struggle", 1912-1914/ trans.1934より抜粋、翻訳)

※全て原文のまま引用



**【5】** あなたは、小学校6年生の授業で、以下の作品を題材にワークショップの講師を務めます。事前準備として、子どもたちに向けて作品解説を書くことになりました。資料 [A] ～ [C] をバランスよく利用したうえで、わかりやすく解説を記述してください。また、子どもたちが作品鑑賞についてより深く考えられるように文章を構成してください。

[A]



柳幸典《パシフィックザ・アント・ファーム・プロジェクト》 1996年制作  
 アリ、着色した砂、プラスチック・ボックス、プラスチック・チューブ、プラスチック・パイプ  
 30.0cm x 45.0cm x 49個 テート・ギャラリー蔵

**[B]** 作品の展示キャプション（テート・モダン）と略歴

**[キャプション]**

柳は49の国や地域の旗を表すために、着色した砂を相互に接続した透明なプラスチックの箱に満たした。これらの旗には太平洋を国境とする国々や旧植民地の宗主国、マオリ族やアボリジニ族のような領土主権を持たない先住民族も含まれている。柳は数千匹のアリをボックスに放ち、アリがある旗から違う旗へと砂を運ぶ様子を作品とした。アリの動きは、グローバルな移動や異なる国々が徐々に侵食され、新たな国境が創造されることを示唆する。柳は「国家という概念を疑っている。国家や国境、国旗は幻想的なフィクションになってしまった」と語る。(2006年、翻訳)

**[略歴]**

- 1959年 福岡県生まれ
- 1985年 武蔵野美術大学大学院造形研究科修了
- 1990年 イェール大学大学院美術学部彫刻科修了。この年から《ザ・アント・ファーム・プロジェクト》を本格的に開始、「境界、移動、侵犯」などをテーマにした作品やプロジェクトを国内外で発表
- 2005年～ 広島市立大学芸術学部准教授
- 2007年～ 広島アートプロジェクトのアート・ディレクションを開始
- 2008年 犬島アートプロジェクト「精錬所」を発表



[C] 《パシフィック》に関する記事など

1990年に柳幸典は「ザ・ワールドフラッグ・アント・ファーム（万国旗蟻農場）」をつくり始めました。……（略）……アリが動き回りながら、砂をひとつの「旗」から別の「旗」へ運ぶことによって、一つずつの旗の本来のモチーフは突き崩され、同時に新しいパターンとつながりが「旗」相互の間に形成されていきます。柳は、作品を最初に制作するときは、アリがいるいるなセクションを侵食するのをコントロールします。次いで、彼はすべてのアリを取り除き、接着スプレーで砂を固め、展示できるようにしました。……（略）……柳は、アメリカやイギリスのような巨大権力の旗と、より小さい諸民族の旗を並べ置くことによって、移民、ナショナル・アイデンティティ、世界の権力バランスなどの時事問題について、慎重に考えるよう、見るものに問いかけていきます。

（テート・ギャラリー編、奥村高明・長田謙一監訳『美術館活用術～鑑賞教育の手引～』p.77、美術出版社、2012年）

（略）働き者の「蟻＝日本人」という経済大国へと邁進した我が国のメタファーを読み取っていた人もいたかもしれな

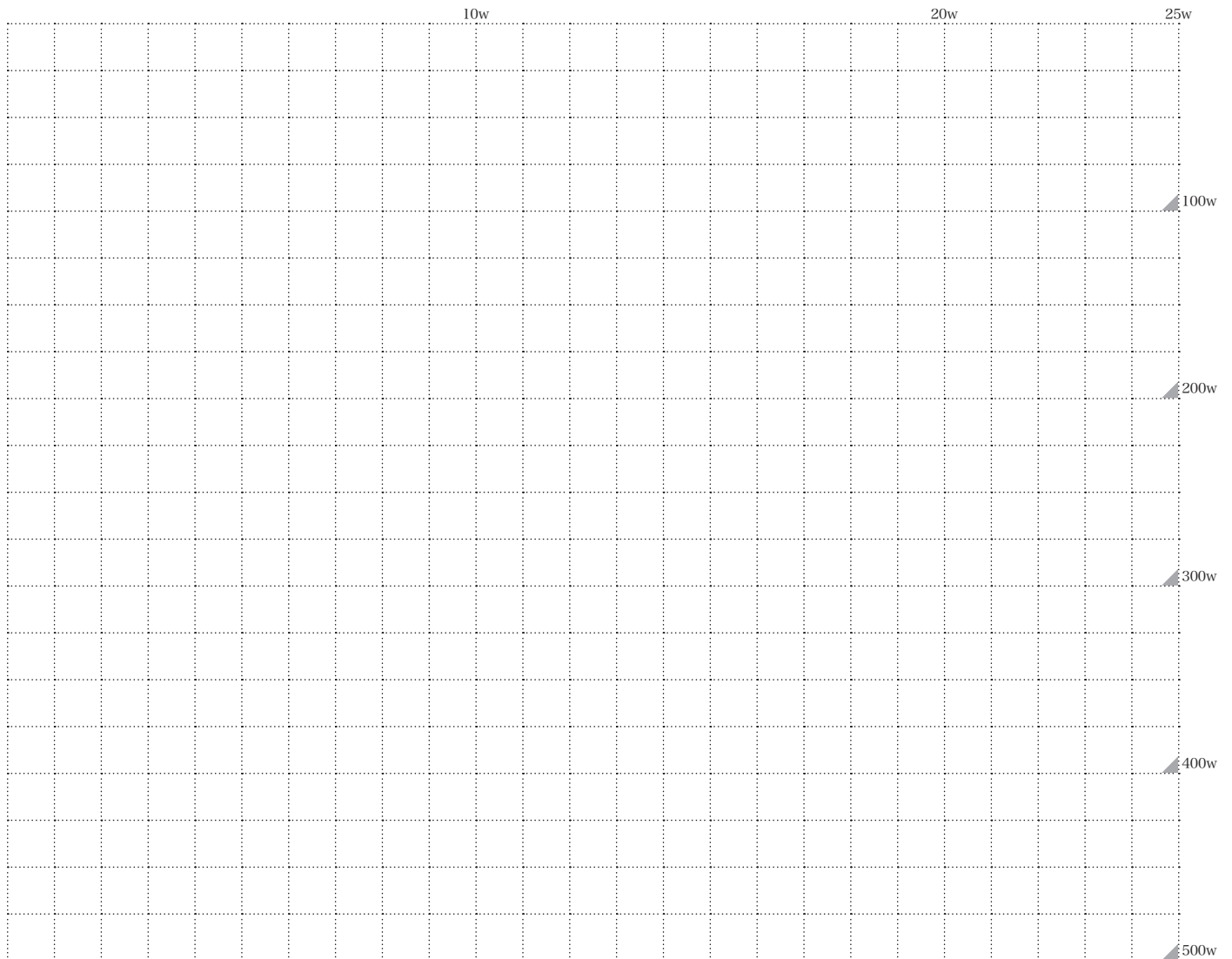
い。だがそれ以上に、ベルリンの壁が崩壊した後、多国籍経済が露になるグローバル社会、その陰で増加する貧民や移民、そして絶えざる戦争といった危機的状況のなかで、「アント・ファーム・プロジェクト」は越境や国境の意味を問う秀逸な名作として多くの人々の心をとらえた。（略）

（岡部あおみ「柳幸典」、武蔵野美術大学芸術文化学科 web サイト『Culture Power』、2007年）

（略）柳によれば、戦争はひとつの結果であって、その奥底にはそれらの源泉となる「システム」があるという。それは、はっきりと目に見えるわけではないものの、国民国家や貨幣制度、あるいは天皇制の基盤となっている。アートによってこの「システム」を目に見えるようにすること。柳の関心はここに注がれている。（略）

（福住廉取材・文「柳幸典」、『美術手帖』2003年6月号 p.89、美術出版社）

※全て原文のまま引用



— 禁無断転載 —

© 2013 美術検定実行委員会